蝉、ひぐらしを詠む万葉歌と中国文学

宋 成 德

万葉集の歌と漢詩文との間の類似点を一つ一つの素材について調査し、詩と歌の間の影響関係について論じる試みを続けて来た(一)。本論文は、月、雁に引き続いて、虫の蝉、ひぐらしを取り上げる。

第一節　蝉と都の思い

万葉集に、次のような蝉を詠んだ歌が一首ある。

安芸国の長門の島にして磯辺に船泊まりして作る歌五首

石走る　滝もとどろに　鳴く蝉の　声をし聞けば　都し思ほゆ

（巻十五・三六一七）

巻十五に収められた天平八年（七三六年）の遣新羅使の歌である。題詞から、遣新羅使が広島県安芸郡あたりに辿り着いた時の歌であることが分かる。左註には「右一首、大石蓑麻呂」と作者名も記されてある。

万葉集の歌の本文で、蝉（せみ）が詠まれたのは、この歌だけである。万葉集で、蝉の鳴き声が、文学表現の対象になったのは、単なる偶然ではなく、中国文学の素材の受容と関わると思われる。そう考える理由は、万葉集と対照的に『懐風藻』では、蝉の声が多く詠まれているからである。すこし煩わしいかも知れないが、その例をすべて挙げてみる。

玄燕翔已歸　寒蝉嘯且驚

（紀朝臣古麻呂「秋宴」『懐風藻』23）

舞庭落夏槿　歌林驚秋蝉

（伊與部馬養「從駕」『懐風藻』36）

玄燕翔りて已に帰り　寒蝉嘯きて且驚く

庭に舞ひて夏槿を落らし　林に歌ひて秋蝉を驚かす

稲葉負霜落

稲葉霜を負ひて落ち

蟬聲逐吹流　蟬の声吹を逐ひて流る
（大神朝臣安麻呂「山齋言志」『懐風藻』39）

寒蟬唱而柳葉飄　寒蟬唱ひて柳葉飄り
霜鴈度而蘆花落　霜雁度りて蘆花落らふ
（山田史三方「秋日於長王宅宴新羅客」序『懐風藻』52）

寒蟬鳴葉後　寒蟬葉後に鳴き
朔鴈度雲前　朔雁雲前を度る
（下毛野朝臣蟲麻呂「秋日於長王宅宴新羅客」『懐風藻』65）

蟬息涼風暮　蟬は息む涼風の暮
雁飛明月秋　雁は飛ぶ明月の秋
（安倍朝臣廣庭「秋日於長王宅宴新羅客」『懐風藻』71）

山中猿吟斷　山中猿吟断え
葉裏蟬音寒　葉裏蟬音寒し
（左大臣藤原朝臣總前「秋日於長王宅宴新羅客」『懐風藻』86）

遼夐遊千里　遼夐千里に遊び
徘徊惜寸心　徘徊寸心を惜しむ
風前蘭送馥　風前蘭は馥を送り
月後桂舒陰　月後桂は陰を舒ぶ

斜鴈凌雲響　斜雁雲を凌ぎて響し
輕蟬抱樹吟　軽蟬樹を抱きて吟く
相思知別慟　相思知りぬ別の慟を
徒弄白雲琴　徒らに弄ぶ白雲の琴
（石上朝臣乙麻呂「飄寓南荒、贈在京故友」『懐風藻』115）

蟬は、百二十首の漢詩を集めた『懐風藻』で、詩の本文で七例、序文に一例、合わせて八例も見られる。蟬を詠むこと、蟬の声を詠むことが如何に好まれたかを知ることが出来る。

漢詩文の素材の一つである蟬の鳴き声が、日本漢詩の世界に早く受容され、そして歌の素材としても取り入れられたのではないだろうか。

それでは、万葉集の三六一七番歌の表現、詠み方から、漢詩文の受容を具体的に指摘することは出来るであろうか。

まず、「石走る　滝もとどろに　鳴く」という表現について触れたい。三六一七番歌の滝は、新日本古典文学大系『萬葉集』、新編日本古典文学全集『萬葉集』が指摘するとおり、必ずしも実景ではない。蟬の鳴き声を、滝の音に喩えた比喩である。

それでは、中国文学では、蟬の声を滝の音に喩えた例は

見られるだろうか。

まず、蝉の声は詩では楽器の音に喩えられる。

嗟羣吟以近唱兮　嗟群吟し以て唱ふに近く
似簫管之餘音　簫管の餘音に似る
（「蝉賦」『傅玄集』）

單吟如轉簫　単り吟きて簫を転ずるが如く
羣噪學調笙　群れ噪ぎて笙を調ぶを学ぶ
（隋・顔之推「聽鳴蝉詩」『初學記』蝉）

蝉の鳴き声を「似簫管之餘音」「羣噪學調笙」と、簫、或いは笙の笛の音に喩えて詠むのである。時代が下ると次のような例も見られる。

嫋嫋秋竹梢　嫋嫋たる秋竹の梢
巴蝉聲似磬　巴蝉声は磬に似たり
（白居易「送客回晩興」『全唐詩』）

上方有路應知處　上方路有りて応に処を知るべく
疏磬寒蝉樹幾重　疏磬寒蝉樹幾重
（許渾「長慶寺遇常州阮秀才」『全唐詩』）

白居易、許渾は「巴蝉聲似磬」「疏磬寒蝉」と、蝉の声を、磬の音にも喩える。そして逆に、

庭際孤松隨鶴立　庭際の孤松鶴に隨ひて立ち
窗間清磬學蝉鳴　窓間の清磬蝉の鳴くことを学ぶ
（方干「贈乾素上人」『全唐詩』）

と、磬の音を蝉の鳴き声に喩えて表現する例も見られる。

さらに、唐詩には

碧蘚無塵染　碧蘚塵染むること無く
寒蝉似鳥鳴　寒蝉鳥の鳴くに似る
（姚合「省直書事」『全唐詩』）

好鳥疑敲磬　好鳥磬を敲くかと疑ひ
風蝉認軋箏　風蝉箏を軋るを認む
（杜牧「題張處士山莊一絶」『全唐詩』）

と鳥の鳴き声、箏の音などに喩えた例も見られる(二)。漢詩文で、蝉の鳴き声を、水の音と関連させて表現したものには、次のような例が見られる。

泉溜潛幽咽　泉の溜るがごとく潜かに幽咽し
琴鳴乍往還　琴の鳴るがごとく乍ちに往還す
長風翦不斷　長風翦るも断えず
還在樹枝間　還樹枝の間に在り
（盧仝「新蝉」『全唐詩』）

危湍和不似　危湍に和するも似ず
細管學難成　細管に学ぶも成り難し
（陸羽「溪館聽蝉聯句」『全唐詩』）

盧仝「新蝉」は、「泉溜潛幽咽」と、蝉の声を泉の流れる音に喩える。また、陸羽は、「危湍和不似」と、急流の音に似ないと詠むが、後に継ぐ「細管學難成」という表現

と併せて、蟬の鳴き声を、激しく流れる水の音と楽器の音に喩えた表現と見ることが出来る。

「溪館聽蟬聯句」は、顔真卿が湖州刺史在任中（七七二～七七七年）に、陸羽、耿湋、皎然などの文人を集めて開いた詩会で詠まれた聯句であり、遣新羅使に受容された可能性は考えられないが、近い時期の中国文学に類似の表現が見られることは、注目に値するであろう。

三六一七番歌における漢詩文の受容は、蟬の声を聞いて都を思うと詠む、その詠み方にもあると思われる。

蟬の鳴き声を聞いて、都を思うと詠む詩は、『懐風藻』にも見られる。さきにも引いた石上朝臣乙麻呂の「飄寓南荒、贈在京故友」は、土佐に流された作者が、京の友人を思う詩である。京の友人への思いを詠んだとは、京への思いを詠んだこととも受け取ることが出来よう。その詩に、「斜鴈凌雲響、輕蟬抱樹吟」と、雁、蟬の鳴き声が詠まれたのである。『懐風藻』に詠まれた蟬の鳴き声は、叙景的な意味合いが強く、万葉集の歌のように、それが京を思う直接なきっかけとして明確に詠まれていないが、京への思いとともに詠まれたことは、三六一七番歌との共通点であると言える。

中国漢詩文で、蟬の鳴き声を聞いて京を思うと詠んだ、或いは旅で蟬の鳴き声を聞いて故郷を思うと詠んだ作品には、次のようなものが挙げられる。

若夫歲聿云暮　若し夫れ歲聿に云に暮れ
上天其涼　上天其れ涼し
感運悲聲　運に感じて声を悲しくして
貧士含傷　貧士 傷を含む
或歌我行永久　或は我が行の永久たるを歌ひ
或哀之乎無裳　或は之の裳無きを哀しぶ
（晉・陸士龍「寒蟬賦」『藝文類聚』蟬）

暫聽別人心即斷　暫らく聽けば別人心は即ち断え
才聞客子淚先垂　才かに聞けば客子涙先に垂る
（隋・盧思道「聽鳴蟬」『藝文類聚』蟬）

寒蟬在樹鳴　寒蟬樹に在りて鳴き
鸛鵠摩天遊　鸛鵠天を摩して遊ぶ
客子悲傷多　客子悲傷多く
淚下不可收　涙下りて収む可からず
（王仲宣「從軍詩」『文選』巻二十七）

鳴蟬厲寒音　鳴蟬は寒音を厲まし
時菊耀秋華　時菊は秋華を耀かす
引領望京室　領を引いて京室を望めば
南路在伐柯　南路は伐柯に在り
（潘安仁「河陽縣作二首」『文選』巻二十六）

王仲宣、潘安仁の詩は、旅を詠んだ詩で、蟬の鳴き声を

詠んだ詩である。潘安仁「河陽縣作二首」の「引領望京室」は、京への思いと見なすことが出来よう。

陸士龍「寒蟬賦」、盧思道「聽鳴蟬」は、蟬を題にする作品である。そのような作品で、「或歌我行永久、或哀之乎無裳」「蹔聽別人心即斷、才聞客子淚先垂」と詠まれたのである。漢詩文で、蟬は旅人がその声を聞いて、別れを悲しみ、旅の辛さを傷むものとして認識されていた。その原因は、寒蟬の鳴き声は、漢詩人にとって、秋の到来を告げる存在であり、その声を聞いて、漢詩人達は季節の変化、時間の流れを感じるからである。

『懐風藻』に詠まれる蟬も、すべて秋蟬である。秋の蟬の鳴き声と望郷の悲しい思いを詠むことは、漢詩の世界の悲愁とも繋がるのである。

第二節　ひぐらしと晩蟬歌、詠蟬、寄蟬の題

万葉集の歌の本文で、蟬（せみ）が詠まれるのは、三六一七番歌のみであるが、題詞で蟬を詠む歌であると示した例はさらにある。

万葉集には、それぞれ「晩蟬歌」（巻八・一四七九、家持、夏雑歌）「詠蟬」（巻十・一九六四、夏雑歌）「寄蟬」（巻十・一九八二、夏相聞歌）という題を持つ歌が三首見られる。しかし、これらの歌の本文に詠まれるのは、蟬（せみ）ではなく、「ひぐらし」である。それは何故だろうか。

三首の歌の題詞と歌の本文との関係については、二つの可能性が考えられる。

一つは、題詞が歌題として先に出されて、その題によって歌が詠まれたことである。「晩蟬歌」「詠蟬」「寄蟬」に類似する蟬を意識した詩題、作品は、漢詩文でも多く見られる。『藝文類聚』だけを見ても、孫楚「蟬賦」、陸士龍「寒蟬賦」、盧思道「聽鳴蟬」、張正見「寒樹晩蟬疎」、簡文帝「聽早蟬」、沈約「聽蟬鳴應詔」、褚澐「賦得蟬」、范雲「詠早蟬」、王由禮「賦得高柳鳴蟬」、劉刪「詠蟬」、江總「詠蟬」、蔡邕「蟬賦」、曹大家「蟬賦」、曹植「蟬賦」、晋明帝「蟬賦」、温嶠「蟬賦」、傅咸「黏蟬賦」、顔延之「寒蟬賦」、郭璞「蟬贊」、梁昭明太子「蟬贊」などが見られる。蟬を詠む文学が六朝時代に如何に盛んであったかを窺うことが出来る。

「晩蟬歌」という題が、漢詩文の詩題によることは早く指摘されているが、「詠蟬」「寄蟬」も、漢詩文の詠題に学んだ結果であると考えられる。とすれば、漢語「蟬」に相当するものが「ひぐらし」であると、万葉歌人は認識していたことになる。

題詞と歌の本文の関係において、もう一つの可能性は、

「ひぐらし」を詠んだ歌が先にあって、「晩蟬歌」「詠蟬」「寄蟬」という題が後に付けられたことである。つまり、歌の作者が「ひぐらし」を詠んだ時、必ずしも漢語の「蟬」を意識したとは限らない。漢詩文的な題が必要になった時、作者或いは編者によって題詞が付けられたことである。「ひぐらし」に相当する漢語は、「蜩」と思われるが、「晩蜩歌」「詠蜩」「寄蜩」にしなかったのは何故だろうか。蜩は、『藝文類聚』で、曹植「愁思賦」(愁)、王褒「洞簫賦」(簫)、繁欽「桑賦」(桑)、沈約「八詠・悲落桐」(桐)などの作品に詠まれるが、蜩を題にした作品は、傅咸「鳴蜩賦」のみである。歌題として「詠蟬」「寄蟬」などがもっと漢詩文の詩題に近い、と作者或いは編者は考えたのではないだろうか。

蜩は、『新撰字鏡』に「徒貂反、大蟬」とあり、蟬の一種と考えられる。『爾雅』の「蜩」に対する解釈文も、『藝文類聚』では、蟬を詠んだ詩文とともに「蟬」の項目に纏められている。『藝文類聚』の「蟲豸部」には、蟬、蠅、蚊、蜉蝣、蛺蝶、螢火、蝙蝠、叩頭蟲、蛾、蜂、蟋蟀、尺蠖、蟻、蜘蛛、蛸、螳蜋の項目が見られ、蜩には単独で項目を立てず、「蟬」の項目に纏めている。蜩を詠んだ作品に「詠蟬」「寄蟬」という題詞がつけられたのは、分類上、蜩が蟬に属するという認識が働いていたかも知れない。

蟬の題の下に、ひぐらしの歌が詠まれたにしろ、「ひぐらし」の歌に、「詠蟬」「寄蟬」という題が付けられたにしろ、作者、或いは編者のいずれかが、漢語の「蟬」と「ひぐらし」を同じものと認識したことは変わらない。特に、家持の巻八の一四七九番歌は、歌の内容から、題詞に「晩」を付ける根拠が見られず、「晩蟬歌」は家持自身が付けた題詞である可能性が高い。少なくとも家持は漢語の「蟬」に当たるものは「ひぐらし」と認識したのである。

以下、蟬を詠んだ三六一七番歌に続いて、蟬と同一視された「ひぐらし」を詠んだ歌と漢詩文との関わりについて検討して見よう。

第三節　夏のひぐらしと物思い

万葉集には、次のようなひぐらしを詠んだ歌が見られる。

大伴家持が晩蟬(ひぐらし)の歌一首

隠りのみ　居(を)ればいぶせみ　慰むと　出で立ち聞けば
来鳴くひぐらし　　(巻八・一四七九、夏雑歌)

蟬を詠む

黙もあらむ　時も鳴かなむ　ひぐらしの　物思ふ時に
鳴きつつもとな　　(巻十・一九六四、夏雑歌)

家持の一四七九番歌は、引き籠もってばかりいて、鬱陶

しいので、気を晴らそうと外に出ると、ひぐらしの鳴き声が聞こえたと詠んだ歌である。巻十の一九六四番歌は、よりによって、物思いをする時に、ひぐらしの鳴き声が聞こえると詠んだ歌である。二首の歌の共通点は、心が晴れ晴れしている時ではなく、鬱陶しい時、物思いをする時に聞こえて来るひぐらしの鳴き声を詠んだことである。このような詠み方は、望郷の思いと蟬の鳴き声を詠むことと共通する。

漢詩文でも、蟬は、望郷の思いだけではなく、様々な物思いとともに詠まれる。

秋風發微涼　秋風微涼を発ち
寒蟬鳴我側　寒蟬我が側に鳴く
原野何蕭條　原野何ぞ蕭條たる
白日忽西匿　白日忽ちに西に匿る
感物傷我懷　物に感じて我が懷を傷め
撫心長太息　心を撫して長く太息す
（魏・曹植「贈弟白馬王彪」『藝文類聚』友悌）

樹青草未落　樹青く草未だ落ちず
蟬涼葉已危　蟬涼しく葉已に危し
還深長夜想　還深む長夜の想
顧憶臨邛巵　顧みて憶ふ臨邛の巵
（梁・呉均「秋念詩」『藝文類聚』秋）

蕭瑟含風蟬　蕭瑟たり風を含む蟬
寥唳度雲鴈　寥唳たり雲を度る雁
……
耿介繁慮積　耿介にして繁慮積り
展轉長宵半　展転して長宵も半ばなり
（謝惠連「秋懷詩」『文選』巻二十三／『藝文類聚』秋）

また、漢詩文には、蜩と物思いを詠んだ例も幾つか見られる。

四節更王兮秋氣悲　四節王を更へ秋気悲し
遙思倘怳兮若有遺　遥思倘怳として遺り有るが若し
……
野草變色兮莖葉希　野草は色を変へて茎葉希なり
鳴蜩抱木兮鴈南飛　鳴蜩は木を抱きて雁南に飛ぶ
（魏・曹植「愁思賦」『藝文類聚』愁）

有彗彗之鳴蜩　彗彗と鳴く蜩
于台府之高槐　台府の高槐に有り
物處陰而自慘　物陰に處して自ら慘しぶ
奚厥聲之可哀　奚ぞ厥の声の哀れむ可き
秋日悽悽兮　秋日悽悽たり
感時逝之若頽　時の逝くこと頽るるが若きに感ず
曷時逝之是感兮　曷ぞ時逝きて是に感ずる

感年歳之我催　　年歳の我を催すに感ず

（晋・傅咸「鳴蜩賦」『藝文類聚』蝉）

漢詩文で、蝉、蜩は、「感物傷我懷」「還深長夜想」「耿介繁慮積」と、或いは「遙思悄怳兮若有遺」「曷時逝之是感兮、感年歳之我催」と、様々な物思いとともに詠まれたことが確認出来る。

物思いをする時に聞こえて来るひぐらしの鳴き声を詠む万葉集の歌は、上のような中国文学の影響を受けているのではないだろうか。

ただし、万葉集の歌と漢詩文との間には、一つの大きな違いがある。それは、漢詩文で、物思いと詠まれた蝉は、秋蝉であり、「夏雑歌」に収められた万葉集の一四七九、一九六四番歌は、夏のひぐらしであることである。

漢詩文にも、夏の蝉は詠まれる。夏の蝉を詠んだ作品に、陳子良「夏晩尋于政世置酒賦韻」、顔延之「夏夜呈從兄散騎詩」が見られる。しかし、中国文学では、一般的に、夏の蝉と人の物思いは詠まれない。というよりも、そもそも中国文学で夏の物思いを詠むことは、文学の主流ではない。中国漢詩文では、春と秋の物思いを詠むことが普通であり、その秋の物思いを詠む作品、悲秋の文学伝統の中に、蝉、蜩の虫の声が詠まれるのである。

『藝文類聚』の「蝉」の項目は、「禮記曰、仲夏之月、蝉始鳴。季夏之月、寒蝉鳴」と『礼記』の記述を引用する。『礼記』の記述からも、中国の蝉も日本と同じように夏から鳴き始め、それが一番盛んに鳴くのが夏であることが推測される。中国文学に詠まれた蝉と万葉集の歌に詠まれたひぐらしは、生物学的に実際に異なるかも知れない。しかし、中国文学で、ひたすらに秋の蝉が詠まれるのは、根本的に言えば、詩人達が、専ら秋の思いを詠むことによる。『礼記』には「季夏之月、寒蝉鳴」と、寒蝉は夏の末に鳴くと記されているが、実際に、漢詩文に詠まれた寒蝉は『藝文類聚』では、すべて秋蝉である。『懐風藻』に於いても状況は変わらない。

万葉集で、夏のひぐらしが詠まれたこと、或いはひぐらしの歌が夏雑歌に編集されたことは、中国人の文学意識と明らかに異なる。その季節感覚は、盛んに鳴くひぐらしの鳴き声を聞くのは夏であるという生活実感に基づくものであろう。

第四節　ひぐらしと恋

万葉集には、恋の思いとともに詠まれたひぐらしの歌が幾つか見られる。

恋と詠まれたひぐらしの歌は、遣新羅使が詠んだ三五八

九、三六二〇番歌と、巻十の「夏相聞」に見られる女性の恋を詠んだ一九八二番歌である。

新羅に遣はさるる使人等、別れを悲しびて贈答し、また海路に情を慟ましめて思ひを陳べ、并せて所に当たりて誦ふ古歌

夕されば　ひぐらし来鳴く　生駒山　越えてそ我が来る　妹が目を欲り　（巻十五・三五八九、秦間満）

安芸国の長門の島にして磯辺に船泊まりして作る歌五首

恋繁み　慰めかねて　ひぐらしの　鳴く島陰に　廬りするかも　（巻十五・三六二〇、遣新羅使）

蝉に寄する

ひぐらしは　時と鳴けども　恋しくに　たわやめ我れは　定まらず泣く　（巻十・一九八二、夏相聞）

遣新羅使の三六二〇番歌は、島陰に庵を結び、仮寝をし、恋しい思いをしている時に、聞こえたひぐらしの鳴き声を詠んだ歌である。ひぐらしは、単なる風物の表現ではなく、作者の恋の思いと関わる。新日本古典文学大系『萬葉集』が「鳴き声に物思いはいっそうつのるばかりであったろう」と指摘したとおり、ひぐらしの声は作者の心境と無関係な存在ではない。

もう一首の遣新羅使歌の三五八九番歌も、妻のことを思いながら越える生駒山で聞くひぐらしの声を詠んだ歌である。夕暮れに鳴くひぐらしの寂しい声を聞いて、妻のことを思い出したか、妻のことを思いながら山を越える時にひぐらしの声を聞いて一層寂しくなったか、明らかではない。しかし、前の歌とともに、旅での妻への恋心とひぐらしの鳴き声を詠んだ歌と見ることが出来よう。

巻十の「夏相聞」に見られる一九八二番歌は、時を定めて鳴くひぐらしと、いつも止むことなく続く自分の恋の思いを対照的に詠んだ女性の歌である。一九八二番歌に類似する比喩、或いは反喩は万葉集で多く見られる。

千鳥鳴く　み吉野川の　川の音の　止む時なしに　思ほゆる君　（巻六・九一五）

湯の原に　鳴く葦鶴は　我がごとく　妹に恋ふれや時わかず鳴く　（巻六・九六一）

あしひきの　山下とよみ　行く水の　時ともなくも恋ひ渡るかも　（巻十一・二七〇四）

咲く花は　過ぐる時あれど　我が恋ふる　心の中は止む時もなし　（巻十一・二七八五）

恋衣　着奈良の山に　鳴く鳥の　間なく時なし　我が恋ふらくは　（巻十二・三〇八八）

伊香保風　吹く日吹かぬ日　ありといへど　我が恋のみし　時なかりけり　（巻十四・三四二二）

印南野の　赤ら柏は　時はあれど　君を我が思ふ　時はさねなし

（巻二十・四三〇一）

以上の歌で詠まれる川、鶴、鳥、風などには、多かれ少なかれ、皆叙景的な要素が認められよう。巻十の一九八二番歌のひぐらしにおいても同じことが言える。つまり、一九八二番歌は、ひぐらしの鳴き声を聞きながら恋の思いをすることを詠んだ歌である。

ひぐらしが恋の思いとともに詠まれることは、漢詩文に見られない万葉歌の特徴であると指摘されている(三)。これは、万葉集の歌の特徴というよりも、漢詩文では恋を正面から詠まない特徴と関わると思われる。

漢詩文で男性の恋心は、望郷の思い、旅の辛さの表現によって代替される。そのような作品を視野に入れると、蟬と恋心とを詠んだ作品は、漢詩文においても皆無とは言えなくなる。上で挙げた盧思道「聽鳴蟬」（『藝文類聚』蟬）の「暫聽別人心即斷、才聞客子涙先垂」は、恋心を詠んだ例に数えることが出来るかも知れない。

漢詩文には、次のような作品も見られる。

與君結新婚　君と新婚を結び
宿昔當別離　宿昔当に別離すべし
涼風動秋草　涼風秋草を動かし
蟋蟀鳴相隨　蟋蟀鳴いて相ひ隨ふ
冽冽寒蟬吟　冽冽として寒蟬吟じ
蟬吟抱枯枝　蟬吟じて枯枝を抱く
枯枝時飛揚　枯枝時に飛揚し
身體忽遷移　身体忽ち遷移す
不悲身遷移　身の遷移するを悲しまず
但惜歲月馳　但歲月の馳するを惜しむのみ

（魏文帝「於清河見輓船士新婚別妻一首」『玉台新詠』巻二）

秋蟬噪柳燕辭楹　秋蟬柳に噪ぎ燕楹を辞す
念君行役怨邊城　君が行役し辺城に怨むことを念ふ

（「燕歌行」『謝霊運集』）

魏文帝の歌は、新婚の妻との別れを詠む詩であり、謝霊運の詩は、行役に行った夫を思う女性を詠む詩である。そこに蟬が詠まれたのである。離別を怨み、人を恋ふ心とともに詠まれた蟬ではないだろうか。

恋とひぐらしを詠む遣新羅使の旅の歌と、巻十の一九八二番歌は、表現上で、漢詩文の受容を確定的に言うことは出来ないが、やはり、蟬の声を聞いて物思いをすると詠む漢詩文の方法に学んだところが多いのではないだろうか。

第五節　ひぐらしと花

万葉集に、ひぐらしと花を詠む歌が二首見られる。

八月七日の夜に、守大伴宿祢家持が館に集ひて宴する歌

ひぐらしの　鳴きぬる時は　をみなへし　咲きたる野辺を　行きつつ見べし　（巻十七・三九五一）

風を詠む

萩の花　咲きたる野辺に　ひぐらしの　鳴くなるなへに　秋の風吹く　（巻十・二二三一、秋雑歌）

三九五一番歌は、家持の館の宴席で、大日秦忌寸八千嶋（だいさくわんはだのいみきやちしま）が詠んだ歌である。ひぐらしが鳴くことと、女郎花が咲くことを「時は」で繋げて表現した歌である。

万葉集には「時は」或いは「時に」で二つの景物を詠む例が幾つか見られる。

雲隠り　雁鳴く時は　秋山の　黄葉片待つ　時は過ぐれど　（巻九・一七〇三）

ほととぎす　いとねたけくは　橘の　花散る時に　来鳴きとよむる　（巻十八・四〇九二）

さ雄鹿の　妻問ふ時に　月を良み　雁が音聞こゆ　今し来らしも　（巻十・二一三一）

この雪の　消残る時に　いざ行かな（ゆ）　山橘の　実の照るも見む　（巻十九・四二二六）

一七〇三番歌は、雁と黄葉、四〇九二番歌は、橘とほととぎす、二一三一番歌は、鹿と雁、四二二六番歌は、残雪と橘の実を詠む。このような歌で、取り上げられた二つの景物は、決して随意的ではなく、意識的に取り合わされたのである(四)。用語として「時は」「時に」の役割は、「なへに」と共通するところがある(五)。三九五一番歌のひぐらしと女郎花も意識的な取り合わせであると考えられる。

二二三一番歌は、風を詠む歌であるが、「萩の花　咲きたる野辺に　ひぐらしの　鳴くなるなへに」は、萩とひぐらしによる秋景の表現である。それに秋風が加わったのである。

このように、万葉集で、ひぐらしは、女郎花、萩などの花と意識的に詠まれる。

それでは、漢詩文の蟬はどうであろう。

野草變色兮莖葉希　野草色を変へ茎葉希（まれ）なり

鳴蜩抱木兮鴈南飛　鳴蜩は木を抱きて雁は南に飛ぶ

（魏・曹植「愁思賦」『藝文類聚』愁）

蟬鳴早秋至　蟬鳴きて早秋至り

蕙草無芳菲　蕙草芳菲無し

（梁・蕭子雲「落日郡西齋望海山詩」『藝文類聚』遊覧）

秋風起兮寒鴈歸　秋風起りて寒雁帰る

寒蟬鳴兮秋草腓　寒蟬鳴きて秋草腓（や）む

（梁・元帝「擬秋氣搖落賦」『藝文類聚』賦）

寒蟬噪楊柳　寒蟬は楊柳に噪ぎ
朔吹犯梧桐　朔吹は梧桐を犯かす
（陳・張正見「寒樹晩蟬疎詩」『藝文類聚』蟬）

草歇鶗鳴初　草歇みて鶗鳴くこと初めなり
蟬思花落後　蟬は思ふ花落ちし後
（梁・簡文帝「聽早蟬詩」『藝文類聚』蟬）

漢詩文で秋は万物を凋落させる季節である。そのような季節感の中で蟬は、多くは、色を失って行く草木、凋落して行く風景とともに詠まれる。万葉集の歌と対照的であることは明らかである。

ひぐらしと花の取り合わせは、むしろ『懐風藻』の漢詩とやや近い。

欲知閒居趣　閑居の趣を知らまく欲り
來尋山水幽　来たり尋ぬ山水の幽きことを
浮沈烟雲外　浮沈す烟雲の外
攀翫野花秋　攀翫す野花の秋
稻葉負霜落　稲葉霜を負ひて落ち
蟬聲逐吹流　蟬の声吹に逐ひて流る
（大神朝臣安麻呂「山齋言志」『懐風藻』39）

于時露凝旻序　時に露旻序に凝り
風轉商郊　風商郊を転る

寒蟬唱而柳葉飄　寒蟬唱ひて柳葉飄り
霜鴈度而蘆花落　霜雁度りて蘆花落らふ
小山丹桂　小山の丹桂
流彩別愁之篇　彩を別愁の篇に流し
長坂紫蘭　長坂の紫蘭
散馥同心之翼　馥を同心の翼に散らす
（山田史三方「秋日於長王宅宴新羅客」序『懐風藻』52）

風前蘭送馥　風前蘭は馥を送り
月後桂舒陰　月後桂は陰を舒ぶ
斜鴈凌雲響　斜雁雲を凌ぎて響し
輕蟬抱樹吟　軽蟬樹を抱きて吟く
（石上朝臣乙麻呂「飄寓南荒、贈在京故友」『懐風藻』115）

『懐風藻』で、蟬と詠まれる風景は、中国漢詩文と大きく異なる。

一色に凋落する自然を詠む中国漢詩文にも、わずかでありながら、次のような例を見ることが出来る。

歸雁映蘭畤　帰雁蘭畤に映じ
游魚動圓波　游魚円波を動かす
鳴蟬厲寒音　鳴蟬寒音を厲まし
時菊耀秋華　時菊秋華を耀かす

（潘安仁「河陽縣作二首」『文選』巻二十六）

澗鳥鳴兮夜蟬清　澗鳥鳴きて夜蟬清し
橘露靡兮蕙烟輕　橘露靡きて蕙烟軽し
（宋・謝莊「山夜憂」『藝文類聚』總載山）

早蟬清暮響　早蟬暮響を清らかにし
崇蘭散晚芳　崇蘭晚芳を散じる
（趙中虛「遊清都觀尋沈道士得芳字」『全唐詩』）

これらの作品と『懐風藻』の詩を考え合わせると、万葉集のひぐらしと花も、漢詩文と無関係とは思われない。

第六節　ひぐらしの鳴き声の鑑賞

万葉集には、ひぐらしの鳴き声を、毎日聞いても飽きないと詠んだ歌が一首ある。

蟬を詠む

夕影に　来鳴くひぐらし　ここだくも　日ごとに聞けど　飽かぬ声かも　（巻十・二一五七、秋雑歌）

二一五七番歌は、秋雑歌の「詠蟬」に見られる歌である。ひぐらしの声は、「日ごとに聞けど　飽かぬ声かも」と詠まれる。この捉え方は、ひぐらしの声を聞いて、秋を感じる、物思いをする、恋心が募ると詠む作品の捉え方とかなり対照的である。

二一五七番歌のひぐらしの声に対する積極的な捉え方は、次のような漢詩文の蟬の捉え方と関わりがあるのではないか。

天寒響屢嘶　天寒く響（こえしばしばむせ）屢（しばし）嘶び
日暮聲逾促　日暮れて声（こえ）逾（いよいよ）促す
繁吟欲如盡　繁吟尽きんと欲するが如く
長韻還相續　長韻還（また）相ひ続く
（梁・褚澐「賦得蟬詩」『藝文類聚』蟬）

端綏挹宵液　端綏宵液を挹（く）み
飛音承露清　飛音露承けて清し
（梁・范雲「詠早蟬詩」『藝文類聚』蟬）

葉疎飛更迥　葉疎らにして飛ぶこと更に迥（とは）く
秋深響自清　秋深く響き自ら清し
（隋・王由禮「賦得高柳鳴蟬詩」『藝文類聚』蟬）

聲流上林苑　声は上林の苑に流れ
影入侍臣冠　影は侍臣の冠に入る
（陳・劉刪「詠蟬詩」『藝文類聚』蟬）

容麗蜩螗　容（かたち）は蜩螗より麗（うるわ）しく
聲美宮商　声は宮商より美し
（晋・陸士龍「寒蟬賦」『藝文類聚』蟬）

蟬の声を捉える表現に「長韻」「飛音承露清」「秋深響自清」「聲流上林苑」などが見られる。特に「聲美宮商」

は、蝉の声が音楽より美しいと詠む(六)。蝉の声を各種の楽器に喩えて詠んだ詩も思い出されよう。そのような漢詩文の蝉の鳴き声の捉え方が、二一五七番歌の「日ごとに聞けど　飽かぬ声かも」という表現に繋がったのではないだろうか。

〈注〉

(一) 雁については、「万葉集の雁と中国文学」(『京都大学國文學論叢』第十八号、二〇〇七年九月)、月については「月を詠む万葉歌と中国文学」(『國語國文』二〇〇八年六月号)で論じた。

(二) 漢詩文では、蝉の声を笙、琴に喩えることについて、呉衛峰「『新撰万葉集』における漢詩への一視点—夏の「蝉」をめぐって」(『國語と國文學』巻八十三・第三号、二〇〇六年三月、二十八～三十九頁)、小林祥次郎「せみ(付)ひぐらし—古典文学歳時記のうち—」(『群馬県立女子大学国文学研究』第十六号、一九九六年三月、五十三～六十六頁)に既に指摘が見られる。

(三) 佐々木民夫「ひぐらしの歌」『万葉研究』(仙台万葉研究会)第十二号、一九九一年十二月、一～二十一頁。

(四) 橘とほととぎすの取り合わせは、意識的な花鳥の取り合わせであり、その源流は、漢詩にあると井手至氏はすでに「花鳥歌の源流」(『萬葉集研究』第二巻、東京、塙書房、一九七三年四月、九～三十三頁)「花鳥歌の展開」(『萬葉集研究』第十二巻、東京、塙書房、一九八四年四月、五十三～七十五頁)で論じた。

雪と橘の取り合わせは、雪と梅、雪と柳、雪と花を詠む文学方法と軌を一にする。

(五) 中島輝賢「なへ(に)様式の継承と変質」(早稲田古代研究会『古代研究』第三十七号、二〇〇四年二月、五十六～六十四頁)参照。

(六) 右の(二)呉衛峰氏論文は、漢詩文の「聲美宮商」という表現についても指摘する。

参考文献について

小島憲之「語の性格—万葉語「晩蝉」の場合—」『美夫君志』第二十三号、一九七九年三月、七十三～七十八頁。
寺窪健志「夏の夜のひぐらしの声—大伴家持「晩蝉歌」試論—」『日本文芸論叢』第十一号、一九九七年三月、一～十二頁。
芳賀紀雄『萬葉集における中國文學の受容』東京、塙書房、二〇〇三年十月、総八一四頁。
小山内舜「『萬葉集』に現われる昆虫類について」『創価女子短期大学紀要』第十二号、一九九二年六月、二一五～二三四頁。

引用本文は次のような書物による。

『萬葉集』（新編日本古典文学全集、小島憲之、木下正俊、東野治之共著、東京、小学館、一九九四年五月～一九九六年八月）
『懐風藻』（日本古典文学大系、小島憲之校注、東京、岩波書店、一九六四年）
『文選』（新釈漢文大系、内田泉之助、網祐次、東京、明治書院、一九六三～二〇〇一年）
『玉台新詠』（新釈漢文大系、内田泉之助、東京、明治書院、一九七四～一九七五年）
『藝文類聚』（汪紹楹校、上海、上海古籍出版社、一九八二年）
『初學記』（北京、中華書局、一九六二年）
『謝霊運集』（顧紹柏校注『謝霊運集校注』鄭州、中州古籍出版社、一九八七年）
『全唐詩』（北京、中華書局、一九六〇年）
『傅玄集』（景印文淵閣四庫全書『漢魏六朝百三家集』台北、台湾商務印書館、一九八三～一九八六年）

（そう　せいとく・本学博士後期課程）